『会議』

トーマス・ケイン・ウォレンサーは背の高い男だ。
偉丈夫と言えるほどの体格ではないが、立ち振る舞いは鋭く、
精鋭騎士団を配下に持つ武人貴族らしい厳しい雰囲気を持っている。

中原の宮廷人であるカシュール・フォリヴァスとは対照的な人柄であると見えた。
カシュール、フィスエシルを始めとするアンゲルウルプの宮廷の主立った人々が
居並ぶ謁見の間で開口一番言った事がそれを物語っていた。

「魔術師の瞬間移動は便利だが、気分のいいものではないな」

「しかし遠く東方からアンゲルウルプまで瞬時に移動できたのだから、あまり文句を言うものではないのでは？」

カシュールは肩を竦めて言った。

「直にお会いするのは初めてですな、ウォレンサー公。私が王国宰相カシュール・フォリヴァスです。遠路はるばるようこそ」

「トーマス・ウォレンサーだ。しかし・・・中原諸侯は実体のない称号を追い求める事が好きだな」

背の高さからトーマスはカシュールを見下ろす事になるのだが、
それだけでなくトーマスはカシュールを侮蔑するような目線で見下している。
どうみても喧嘩を売ろうとしている態度だ。ポルメリアは内心やや緊張する。

周りをどうかと思って周囲を窺うと意外にフォリヴァスの廷臣たちは冷静だ。
フィスエシルに至っては楽しそうに笑みさえ浮かべている。
もっとも彼女に関してはどんな事も面白い出来事と捉える向きがあるので、信用できないのだが。

「実体がない・・・ですか」

「『天使王国』などもはや形骸だ。王国の名において布告された法は絶えてなく、実際の効力もない。
『王国宰相』と名乗る貴公も、実権が及ぶのはフォリヴァスの領域のみであろう。
それでも、切実な身の危険にさらされる事がない中原諸侯は、空虚な称号を巡って不毛な争いを続けている。

聞けば、メルクスで開けられた地獄に通じる穴とやらは、西方から難民だけでなく、
中原諸侯同士の戦争難民も犠牲となって開かれたそうではないか。

貴公ら中原の愚か者どもが今日の破局をもたらしたと考えるのは、不自然な事かね？」

直裁に、出会い頭に非難するトーマス。しかしフォリヴァスの廷臣もカシュール自身も冷静なままだ。

「それを言っても始まりますまい。そうおっしゃる貴公とて、魔物との戦争ばかりでなく、
東方で対立する諸侯との戦いに配下の騎士団を投入される事も多々ありましょう。
ウォレンサー公配下の軍が苛烈な略奪をする事は、中原においても有名ですぞ。公が通った跡は草木一本残らない、と」

「難民として逃がしたりしない。全て捕らえて奴隷商人に売り飛ばしているからな」

トーマスは得意気に言い放った。それを耳にしてポルメリアは呆れると同時に怒りを覚えた。

『善』の陣営にあるものが人々を奴隷として売り飛ばすなど、信じられるものではない。
この男は一体何をしにきたのだ。ただ単に不愉快な思いを撒き散らすだけではないのか。

ところがカシュールは特に怒りを表す事もしなかった。ただただ穏やかに会話を続けるだけなのだ。

「無駄な事はしない、と？」

「政治的な対立と、飢饉による飢えを解消する一石二鳥の手ではないかね」

「乱暴な話だ」

「乱暴でなければ辺境では生きられぬ」

「しかし連中の乱暴さは東方辺境の比ではない」

ここで初めてトーマスの物言いから傲岸な様子が消えた。

「確かにな。我々同士の争いならば相手を全滅させる事まではせぬ。
奴隷として売り払うにせよ、生かす事が前提だ。死人では労働力にならぬ。死人を働かせる邪教徒ではないのだから」

「連中が求めるのは魂そのものですからね。肉体など余計な何かと思っているのでしょう」

「交渉も駆け引きも不可能と思うか？」

トーマス・ウォレンサーは武断的な外見に似つかわしくない事を口にした。
同時に、悪魔の軍団など殲滅するより他にないと思っていたポルメリアにとって衝撃的な事を話す。
連中に話など通じる筈がない。彼らはこの世界の住民を狩るべき対象としか見ていないではないか。

だがトーマスの言葉に憤慨したのはポルメリアだけのようだ。
誰も、そう『善』なる天使の血筋を引くフィスエシルでさえも顔色一つ変えていない。
これはどういう事なのだろう。
自分は何か、場違いのところにいるのか？それともこれは悪夢なのか？そう思わずにはいられない。

「やってみない事には解らないが、連中の目的がテッラムリアの征服だけでなく、
この地の住民全ての魂を収穫する事にあるとしたら、やるだけ無駄と思いますがね」

カシュールがポルメリアの思った通りの発言をしてくれて、ようやく彼女は安堵する。
『善』なる陣営なるものの存在を信じる事ができる。

「それにしても意外でしたな」

「何が」

「軍事力を誇るウォレンサー公が一戦もせずに駆け引きを口にされるとは」

「失敬だな、フォリヴァス公。戦をやるばかりが能ではない。武力も所詮は問題解決の手段の一つに過ぎない。
我が家はそれを怠らないというだけだ。中原諸侯と違ってな」

「ご立派な事です、ウォレンサー公。その調子で会議でも強硬な発言をお願いします。
貴方がおっしゃられて引き下がれば、他に不平を口にする連中も大人しくなるでしょう」

「『王国宰相』として『天使王国』諸侯会議主催か。気苦労が絶えぬな」

「最大とはいえ一諸侯ができる事など限られています。天使たちがこの世を去って以来、
未曾有の危機なのですから、各諸侯に負担を分担してもらうのが筋でしょう」

「腰抜けどもがそんなものを背負うと思うか？」

「背負ってもらいましょう。否応もなく」

トーマスは大声を出して豪快に笑った。この大貴族たちの話はそれで決まったらしい。
意味が解らぬポルメリアは拍子抜けし戸惑ってしまう。だが居並ぶ廷臣たちやフィスエシルは皆了解しているらしい。

「何がなんだか解らない？」

何時の間にやらフィスエシルが側によりポルメリアの耳元に囁く。

「そうですね。お二人は対立しているのかと思いましたが・・・」

「二日後、諸侯会議が行われる。その時はもっと見物よ」

やはりフィスエシルは面白がっているようだ。その感覚がポルメリアにはどうにも馴染めない。

この人たちは、何か劇でもやっているのではないだろうか。ポルメリア一人を観客に見立てて。そう思ってしまう。

こうしている間にも悪魔の軍勢は人々を殺し、大地を蹂躙しているのだろう。
それと戦うためには、こういう手続きが必要なのだと言う。
しかしフィスエシルが言うように自分にこの茶番に付き合う意味があるのだろうか？

疑問を感じながら溜め息を漏らすポルメリアだった。

メルクスの鐘楼。その上で退屈そうに長椅子の寝転ぶ『ワーム』。
欠伸を噛み殺しながら暇そうにしている彼の下にルポレットが報告にやってくる。
だが結果が予想できているせいか、『ワーム』の反応は鈍い。

「オウルバイン軍二万五千を殲滅したと報告が入りました」

「二万五千か・・・多くもあり少なくもある微妙な数字だったんだなー。まぁ殲滅したならめでたいよねー」

解りきっていた報告なので返事にもいまいち感情が入っていない。だが次のルポレットの言葉にはそうはいかなかった。

「こちらの損失は・・・やはり一割ですな」

「一割・・・十個大隊六千の悪魔の一割って言ったら・・・六百？！一個大隊まるごと！マジ？」

「マジ、ですね」

「ちょっと、ちょっとぉ。まだ戦争始めてから一日しかたっていないんだよ。それでもう一個大隊も失ったわけ？」

「六百といってもほとんど兵卒クラスです。中には下士官級もいますが、幹部級は一体も倒されておりません」

「そりゃそうだよ。緒戦で五体も上級悪魔がやられているんだよー。また倒された、なんて事になったら困るじゃないかー」

「魂をがめる為に援軍を呼ばない方針でしたからね」

「がめるは漏らしちゃいけない本音の部分だから黙っときなよ。
しかし予想以上にこちらの被害が出てるよなぁ。うちの軍団ってそんなに弱いの？」

「実戦からだいぶ遠ざかっていましたからね。それにこの世界、
こちらが考えているよりも我々を倒す手段も能力を持った者もいるようです。
『天使王国』というものは対悪魔戦争を睨んでつくられた組織だったようですから、
天使が姿を消して二百年経過しても、それなりの遺風は残っているようですな」

狼頭のルポレットは相変わらず冷静な判断をする。『ワーム』は長椅子の上で胡座をかいて唸っている。

「その他の情況は？掃討戦やらせている四十個大隊の方も同じような被害が出ているとか、そんな報告はない？」

「今のところはまだ何も。やはり二百年内輪揉めに終始していたのですから、
対悪魔装備や戦術も限られた階層や組織にしか受け継がれていないようですな。
まだ奇襲の効果もありますし、昨夜のうちに攻撃を実行した神殿や諸侯の城で損害が出たという報告は、まだ届いていません」

「しかし、いずれ連中が態勢を立て直せば、一割の損害は覚悟しなくちゃならなくなるわけか。

諸部族へ呼びかけた、あれの反応はどうなの？」

「まだ一日ですからねぇ。今のところメルクス周辺に潜んでいたゴブリン、コボルトから参戦の表明がありました。
他はまだ反応待ちです。どうです？諸君主方はともかく、邪神の方々へ付け届けされたら。そうしたら話は随分簡単になりますよ」

はなはだややこしい話なのだが、『悪』の陣営は地獄の諸君主の下に一本化されている訳ではない。
大小様々な『悪』の神々が自分たちの次元、世界を持っていてそこに君臨し、
自分の勢力を広げるために『善』と、必要とあらば『悪』同士でも争っている。
そういう『悪』の神々を信奉する諸族は、悪神とそれぞれの神官を通じて繋がっている。
彼らは悪神に奉仕をしてその恩恵を受けているのだ。
それらの『悪』の神々に協力を要請すれば、自分の配下にある諸部族に神官を通じて連絡を取ってくれるから、
いかに強力とはいえ、よその次元からやってきた新参者の悪魔の軍団が呼びかけるよりも、よほど簡単に呼応してくれるだろう。

だが『ワーム』はにこやかに言った。

「イ・ヤ」

「・・・とことん蓄え込む方針ですか」

「ゴブリン、コボルト、オーク、その他諸々の頭の悪い諸族を動員するのに、
悪神たちに付け届けするというのも非効率的な話じゃない？それに、
あっちにやってこっちになしかって地獄の諸君主に突っ込まれるのもヤな話しだしさ。

展開している大隊に出先で宣伝してもらって、『今こそ人間に復讐する時―』とか、
『荒らせ、奪え、殺せ！』とか煽情的な事を言えば、ちゃんと乗っかってくるよ。連中バカだし」

「とはいえ、効率的な方法とは言えませんな」

「しょうがないよ。ないものをヤリクリしていかなきゃならないんだもの。
うーむ、戦争ってのはなかなかままならんゲームだねぇ」

「いや、この場合は出し惜しみをしてヤリクリしているというべきかと思いますがね」

「そうだっけ。まぁいいじゃん。どちらにせよヤリクリなんだからさぁ。
それより、連中、アンゲルウルプに集合しているんだって？」

都合が悪くなりそうになったので『ワーム』は話題を変える。
そのあからさま加減にルポレットも溜め息をつきたいだろうが、この冷静な補佐官は大して表情の変化を見せなかった。

「魔術師の連絡網を使って、把握したこちらの動きを知らせつつ、
アンゲルウルプでの戦略会議に集まるよう布告しているようです」

「どうやって解った？」

「物好きな奴が高位魔術師の脳を食わずに生かしておいたのですな。何かの情報収集に役に立つのではないかと」

「やるねぇ」

「これは好機です」

ルポレットは感心している『ワーム』にそれ以上喋らせないように畳み掛けた。

「こちらの奇襲攻撃を逃れたもの、手が足らずに攻撃できなかった諸侯や高位神官、
諸部族長がアンゲルウルプに一同に会するのです。これを襲えば根こそぎ彼らの指導者層を殲滅できます。
精鋭部隊を持って、アンゲルウルプを急襲すべきです」

「結構こだわるね、ルポレット」

「出費を抑えるなら博打を打たねばなりますまい」

「しかし、それだけの要人が集まるなら警護も分厚いだろう？こちらにも損害が出るんじゃない？
これ以上上級悪魔の数を減らすというのは、面白くないんだよねぇ」

「例の『城砦落とし』ですか」

「それ以外にも色々いるんじゃないの？こちらの奇襲が失敗した諸侯も集まるって事は、護衛は随分手強い筈。
リスクが高いと思わない？」

「それは否定しません。ただし成功すれば、この後の戦略が楽になる事は確かです。
指導者を失った軍勢など烏合の衆に過ぎません」

成功すれば確かに成果は大きい。初戦の奇襲では人間の有力諸侯のみに的を絞った。

だが今度アンゲルウルプに集結するのは、
聖俗、種族の垣根を越えた『天使王国』指導者層だ。彼らを一挙に殲滅すればその後の戦いはよほど楽になる。
流石の『ワーム』も少し眉間に皺を寄せて考え込んだ。リスクは高いが、成功した時の戦果があまりに大きいのだ。
言ってしまえば、そのアンゲルウルプ襲撃が成功すれば戦争は八割がた『ワーム』の勝ちとなるだろう。
だがもし失敗したらどうなるのか？
補充の利かない戦力の中枢たる上級悪魔を根こそぎ失う事になる。『ワーム』は二度と攻勢をとる事ができない打撃を受けるだろう。
その事実が知れ渡ったらどうなるか？今現在悪魔の軍団に協力しようとしている諸族は確実に考え直すだろう。
地獄の諸君主たちも『ワーム』の戦争は失敗だったと手痛い評価を下すに違いない。
戦いは始まったばかりだ。この段階で主力を失うのは自殺行為だ。
『ワーム』は決断した。
「やめとく」
「やりませんか」
「下手をしたら主力を全て失う事になる。
補助戦力の諸族を手に入れていない段階で主力の上級悪魔を根こそぎ失ったら、もう何もできないよねぇ」
「そうですな」
「それで思ったんだけど」
「はい？」
「今集めている諸部族の方を万単位の戦闘集団として運営して、そちらに連中の主力を向かわせるというのはどう？」
「諸部族の軍勢と、『天使王国』側の主戦力を戦わせるのですか」
「それで連中を消耗させるのさ。こっちは主力を温存しておく。
なに、諸族などいくら失ったって構わない。魂が手に入るぐらいだから好都合じゃないか」
「敵の軍勢を消耗させて、弱ったところをこちらの主力で掃討するのですか」
「そうだね」
「・・・それだけ諸族が集まるといいのですがね。それに連中だって命は惜しい。死ぬと解った戦場になど出向きませんよ」
「そこはそれ。上手いこと乗せてさ。ああいう連中は戦いは数だって思い込んでいるからさ、
さば読みでも水増しでもいいから数をでっち上げれば、勝ち馬に乗ろうとやってくるだろう。
司令官級はこちらで用意して、とにかく『天使王国』側を消耗させるのが狙いなんだから、こっちも勝ちにいかないとね」
「相手側に主力級の脅威であると思わせなければなりませんから、数万は集めないといけませんな。
ゾンビやスケルトンで水増しします？
といっても死霊術に長けている者がいるわけではありませんから、いいとこ用意できるのは数百ですが」

「それでもいいや。なーんか諸族連中にとって噂の種になるような派手な事をぶちかませば、後は一気に食いついてくるよ。
ああいう連中は派手な噂が大好きだからさぁ」

「解りました。その件は各軍団長にも手配させましょう。
集めた諸族の数に応じて魂のボーナスぐらいくれてやらないといけませんな」

「げ。解ったよ。それぐらいは何とかする」

しかし内心手元の二十万にも及ぶ魂に手をつけるつもりがない『ワーム』は、
数万単位の魂を調達する為に別の殺戮を用意しようと考える。

ルポレットはそんな上司の考えを見透かしているのかいないのか、それ以上言わずに次の議論に移った。

「オウルバイン戦を戦った十個大隊の次の目標はいかがしましょう？」

「そのまま他の大隊と同じように神殿や諸侯、『善』なる諸族の拠点、それらの掃討に回して。
そうそう、手強い抵抗があったら迂回して無視してもいいって伝えて。
侵攻の速度が鍵だからねぇ。相手にはできるだけ混乱して恐慌に陥ってもらわないといけないから、
時間かかりそうな敵は当面無視していいや」

「確かに緒戦の勝利で相手を圧倒できれば、心理的にこちらが有利な立場に立てます。
しかしその作戦ですと、精鋭部隊をのちのち残す事になりませんか？」

ルポレットの懸念は当然のものだ。

相手の主力ともなる手ごわい抵抗を見せた都市、神殿、諸族を無視しろという事になると、雑魚ばかり相手をする事になる。
どんな相手と戦っても被害がゼロという訳にはいかない。
雑魚ばかりを叩いて、こちらにも若干の被害が出てきたところで敵の主力級と鉢合わせというのは、
正直賢い作戦とは言えなかった。

「でもね。この世界の連中が我々『悪魔の軍団』が侵攻してきたと知ってから、まだ一日もたっていないんだよね。
悪魔なんて神官の説法かおとぎ話でしか聞いた事のない連中だよ？いかに『天使王国』というものが対悪魔の組織だったとしても、
数百年もの間、我々はこの世界に組織だった侵攻をしていない。そして『天使王国』そのものは二百年間機能喪失状態さ。
一部の有識者が事の重大さを悟ったとしても、末端の者にとっては、やはりおとぎ話か何かなのさ。
その目で見るまではね。だから、こちらの正体を目で見、耳で聞く前になるべく早く、
なるべく多くの連中に我々悪魔が一体どういうものか実体験してもらわないとねぇ。

被害が大きくなればなるほど、連中、及び腰になるよ。
後に残るのが精鋭部隊であったとしても、連中から守るべきものを奪ってしまったら、戦う気力も失せるんじゃないかな。

ま、心配なら、最後には僕が出張って消し炭にしてあげるさ」

『ワーム』は簡単に言ってのけた。

時々ルポレットは思うのだが、『ワーム』の楽天的な考え方は自分自身の圧倒的な戦闘力によるものなのだろう。
どんな苦境になろうとも、最後に自分がその正体を、真なる力を発揮してしまえば、
天界の下級神級の存在でも出てこない限り負ける事はない。そう考えている自分への絶対の自信だった。

確かにそうかも知れない。彼は地獄の支配者にも匹敵する力を持っているのだ。

定命の者が生きる、数多ある物質世界の一つに過ぎないテッラムリアに、
下級神級の存在があるとも思えない。だから気楽でいられるのだろう。

だがふと、彼らしくないこだわりが一つある事を思い出したルポレットは、どうしてもそれを口にせずにはいられなかった。

「例の『城砦落とし』、あれはどうです？」

「どうって？」

「閣下がおっしゃるように『悪』を滅ぼす事のみに血道を上げている、天使の力を持った騎士です。
あれは閣下にとって脅威とはなりませんか？」

「ならないね」

『ワーム』は欠伸を噛み殺して言った。

「僕自身への脅威にはならないね。昔、あれと同じように僕に突っかかってきた下級天使のエンペランスという騎士がいた。
勝敗は聞かなくても解るよね。下級とは言え天使である存在さえも瞬殺だったんだもの、
天使の力を授かっただけの人間に僕が負けると思う？

あれは、どちらかというと軍団にとって脅威になるだろうよ。あれは、軍勢をなぎ払う為にいるような存在だからなぁ。

どういう訳だか、あの『悪』に突っかかっていく事が生き甲斐の奴が、まだどの戦場でも目撃されていない。
あれが出てくると、こっちも信じられないような被害が発生する気がするんだよねぇ。

だから、あれが出てくる前に戦果をできるだけ広げておきたい」
『ワーム』の言葉を聞いてルポレットは静かに頭を下げた。
しかし、どうだろう？自分に対しては脅威にならないが
自分の手足として働く大切な軍団にとっては脅威であると彼も認識している。
ならば、『城砦落とし』の存在は、
テッラムリア征服を目的とする自分たちにとって判明している最大の障害になるのではないだろうか？

『城砦落とし』の居場所が判明次第、これを抹殺せねばなるまい。

冷静な参謀長はそう判断して『ワーム』の下を辞去した。

ウォレンサー公がアンゲルウルプに到着してから二日の後、この執政宮殿にとっては二百年振りの盛事となる諸侯会議が行われた。
かつて『天使王国』盛期には、ここには各地の諸侯が邸宅を構え、様々な問題に対して議論を交わしたものだ。
この会議は、それらの慣習が滅びた後、初めて行われるものだった。
しかも議題は『天使王国』が設立された真の理由、地獄からの侵略である。
天使達が姿を消し、『天使王国』そのものが衰退していく最中、
その本来の目的で会議が開かれるというのも何とも皮肉な話だった。

とはいっても悪魔たちの最初の奇襲で主だった諸侯はほとんど滅んでいる。
世俗の人間諸侯の中で大貴族と呼べる者たちは僅かに五家。その他は大きくても侯爵、伯爵級の中小貴族たちでしかない。

だがそれ以外は意外に盛況だった。
善なる神々の大神官長たち、魔術師ギルドの大物、エルフ、ドワーフ、その他の『天使王国』に半ば属し、
半ば同盟関係を結んでいる諸族の王たち。席の半分以上を埋めるのは彼らだった。

議長席には王国宰相であるカシュール・フォリヴァスが座り、議会広間を守っているのは彼の騎士団である。
ウォレンサー公が無茶を言わない限り、主導権を握るのはフォリヴァス公だった。

ポルメリアには席がない。勇名名高き騎士とはいえど、彼女には一辺の領土も一人の部下もいない。
政治力のある諸侯会議に出席するには、資格がない。

そして意外な事にフィスエシルも傍聴席に座っていた。
彼女もアンゲルウルプの都市魔術師であるとはいえども、アンゲルウルプの支配者である訳ではない。
それにポルメリアに耳打ちして教えてくれたところによると、
魔術師ギルド内の階級でも彼女はそれほど高位という訳ではないらしい。

「ギルドに貢献している訳でもなく、魔術師としての研鑽をそれほど積んでいる訳でもなく、
のんびりアンゲルウルプの塔で暮らしているのが仇になったかしらん」

誰に言うともなくフィスエシルは呟いた。そう思うなら日頃からもっとしっかり活動して欲しい。
おつきの、エルフの少女たちの顔はそう言っているように見えた。

「まぁいいわ。会議で発言しなくても成り行きを見ているだけでも面白いと思うわよ」

「面白い・・・ですか」

会議の行方によってはテッラムリアの将来が決まるというのに、フィスエシルは相変わらずお気楽な物言いをしている。

「まともに考えれば悪魔たちとは生きるか死ぬかの戦いをしなければならない。

でも誰が主導権を握るかってのは、また別問題だものね」

主導権を握り、悪魔の軍団をテッラムリアから追い出す事ができた『英雄』にフィスエシルは嫁ぐと宣言した。
それは彼女と結婚したものに『天使王国』の玉座が転がり込む事を意味する・・・と世俗の諸侯たちは理解した筈だ。

と言う事は、この場で争いが起きるとしたら、その原因を作ったのはフィスエシルという事ではないのか？

「火種が貴女であると思うのは、私の気のせいでしょうか？」

困惑気味のポルメリアが尋ねる。フィスエシルは悪びれもせずに言った。

「安心して。気のせいじゃないから。でも私の事がなくても避けては通れない問題よ。
雑多な集団をまとめる為には、結局主導権争いは避けられないもの・・・おぉっと、さっそく角突き合いが始まったわね」

フィスエシルは大変嬉しそうだ。馬上槍試合か、射的やレスリングの試合でも見るような顔をしている。
ポルメリアは溜め息をついて言葉を失った。

「『王国宰相』と言われるフォリヴァス公が指揮権を握るとおっしゃられたが、
それは何を根拠に言われるのか？私は法と秩序を司る大いなる神に仕えし者。
ここにおいての諸侯とて、我が神を崇め奉る方が大勢いらっしゃいましょう。
『善』なる神々の王として法と秩序を司られる我が神こそが、そしてその神に帰依し信徒を導く者こそ、
憎むべき悪魔との戦に号令するに相応しい者ではありませんか？」

発言したのは法と秩序の神に仕える大神官である。フィスエシルは失笑した。

「ありていに自分か、自分の上役を選べって言えばいいのに、もってまわったややこしい事を言う奴ね。落第」

ポルメリアも同感とは言い辛かったが、しかしいい気持ちになれるような言い方ではなかった。
ああいう発言をする者が戦いの責任を取れるだろうか?直截に言わずに誤魔化した言い方をするのは、
いつも逃げ道を用意しているからではないか?そんな無責任な者が戦いの指導者となれるのだろうか。そう思ったからだ。

案の定、議場からは異議が出た。

「事は戦です。『善』なる軍神を頂く我らが、悪魔との聖なる戦いを指導すべきだ」

武人上がりと見られる軍神の神官が、こちらははっきりと主張した。

「どう思う?同じく『善』なる軍神の使徒としては」

「解りません」

フィスエシルの質問にポルメリアは率直に答えた。

「私は、ただ単に『悪』を滅ぼせば良いと考えています。でも戦争とはそういう考え方で良いのでしょうか?私には解りません」

そう言っている間にも異議は次々と唱えられる。
エルフとドワーフの王たちは、そもそも『天使王国』に属していないのだから、
『王国宰相』の命令に従う義務はないと主張し、ダルマーク、ランキン、
シルポートら辺境の諸侯は実際の武力ではなく中原の政治力学で宰相の位についた者の指示に従う合法性を疑った。
先日のやりとりで一体何が決まったのかポルメリアには解らなかったのだが、
カシュール・フォリヴァスにとっての救いはトマス・ケイン・ウォレンサーが非難がましい事を何も言わないでいる事、
それだけだった。もっともそのウォレンサー公とてカシュールを全面的に支持するとは一言も言わず、
ただ単に沈黙を守っているだけなのだが。

「・・・カシュール坊やはこの会議を、一体どういう落とし所でまとめるつもりかしらね」

フィスエシルは他人事の様に、楽しそうに呟く。毎度の事だが無責任な言い草だと、さすがにポルメリアも黙っていられなかった。

「この会議が長引いて迎撃態勢を敷くのに支障が出たらどうするのです?ここの方々はあまりに事態を軽く見られている」

「政治力学に従って主導権争いをしている場合じゃないって?」

「違いますか?」

「それはそうだけど、これが彼らの通過儀礼と言うか、手続みたいなものだから仕方ないわね。
誰に責任があるのかはっきりさせておかないと、問題が起こった時に争いになるし、
戦争を始めちゃってからもたつくのもまずい話でしょ。最初に優先順位を決めておく方が無難よ」

「それでも、余りにも・・・」

「のんびりし過ぎているって?まぁ、そう思わないでもないけど、儀礼って奴はそういうものだからねぇ」

カシュール・フォリヴァス、法と秩序の神の神官長、軍神の神官、エルフの王、ドワーフの王、辺境に位置する有力な諸侯たち、

それらの代理人たちが議場の中央で話し合いをすべく集まっている。
他の人々は不安げな雑談をしているばかりだ。代理人たちの折衝は紛糾しているようだ。
対悪魔戦争の為に立ち上げられた『天使王国』と言われているが、天使たちがいた当時は悪魔との戦争の記録がない。
天使達が姿を消して二百年の時が流れ、王国そのものが形骸化している中、
一度も機能した事がない対悪魔戦争を遂行する組織としての機構、手続きなど存在する筈もない。

前例がなければその前例を作らなければならないが、それができるだけの豪腕の持ち主は、
議場に集まった者たちの中に存在しているとは思えなかった。

『王国宰相』の肩書きを持つカシュール・フォリヴァスは『天使王国』内最大の諸侯ではあるが、
他を圧倒する存在ではない。他はともかくウォレンサー公は東方においてフォリヴァス家の所領に匹敵する領地を保有している。
彼が反対すればフォリヴァス家の優位は覆されるのだ。

純粋な軍事力だけをみればウォレンサー公がもっとも有力であるのは確かだ。
広大な領地と魔物を圧倒する重装騎兵を多くそろえているのは有名な話だ。
絶えず魔物との戦闘を繰り返しているシルポート、ランキン、ダルマークも数では劣っても練度では他を圧するだろう。
軍神に仕える者たちの魔を滅ぼす力、ドワーフ王の優秀な重装歩兵団も負けてはいない。

魔法能力からすればエルフの王や法と秩序の神に仕える神官たちは侮れないし、魔術師ギルドは『天使王国』最大の魔術団体だ。
全てを備えた存在が一人もいない。ポルメリアは改めてその事に気がついた。だから会議はまとまらない。
彼女は奇妙な無力感に襲われた。今まさにテッラムリアは悪魔の軍団に確実に蝕まれ、『天使王国』は滅びに瀕している。
それなのに、王国を指導する立場の者たちは、自分たちの主張を繰り返すばかりで力を合わせて王国を守るという、
たったそれだけの事すらできないのだ。

私は何故、ここにいるのだろう？ここに座ってまとまらぬ会議の成り行きを見守る事に何の意味があるのだろう。
ただちに席を立ち、守るべきものたちの為に剣を取り戦う事の方がはるかにマシな事ではないのか？
ケルマディクの孤児院・・・あそこを守る事に全力を注ぐべきではないのだろうか。

フィスエシルの言葉に従って、この場で不毛な話し合いをただただ聞き続けるなど無意味な事だ。

ポルメリアがそう思い席を立とうとした時、それより早く会議に参加する者の中で、議事運営を無視して立ち上がった者がいた。
長身のトマス・ウォレンサー公だ。彼は居並ぶ諸侯、諸族の王、神官長、魔術師たちを睨み、そして叫んだ。
会議参加者に向かってではなく、議長席に座るカシュール・フォリヴァスに吠えた。それは完全に会議を無視した発言だった。

「カシュール・フォリヴァス公。あんたと共に行動するには一つだけ条件がある」

カシュール・フォリヴァスはトマス・ウォレンサーの突然の行動に戸惑いやうろたえを見せずに微笑んだ。

「お聞きしましょう、公」

「軍備はこちらで用意しよう。戦略会議には参加させてもらう。だが当方で不足しているのは食い扶持だ。
東方は長雨の影響で今年も不作だ。十分な糧秣を用意する事はできん。
転戦するウォレンサー軍の兵士達、おそらく一万は下らないだろう。彼らを食わせられると、貴公は保証できるかね？」

基本的に軍勢はそれぞれの兵士が手弁当で参加するのが基本だ。もしくは領主たる騎士が召集した小部隊の食い扶持を用意する。
それは自分の領地の収穫物であったり、上級支配者である諸侯から下される軍資金などで用意したりする。
しかし大諸侯といえども一元的に補給を統括した例は、テッラムリアの過去にはない。
直属の兵力、例えば騎士団であっても封土を与え、そこから徴収する年貢、税で全てを賄わせる。

それが封建社会というものだ。

今のトマス・ウォレンサーの発言は、それを根底から覆すものだった。兵力は提供する。だがそれを支える糧秣を用意できない。
だからフォリヴァスで負担するか？それは大諸侯たるウォレンサー公が、
公の場でフォリヴァス公に雇われても良いと言ったも同然だった。ウォレンサー軍が傭兵となると言ったのだ。

会議の場は再び混乱した。こんな事は前例がない。今まで聞いた事がないのだ。
だがその騒ぎが大きくなる前に、カシュール・フォリヴァスの返事が響いた。

「ウォレンサー軍の糧秣、慎んでご負担いたしましょう。
『王国宰相』たる者の権限に置いて、『天使王国』を守る者を支援するのは当然の義務ですから」

「では！我らウォレンサーは『王国宰相』である貴君に指揮権がある事を承認しよう。腹が減っては戦ができぬからなっ」

トマス・ウォレンサーの言葉は、カシュール・フォリヴァスに向かってではなく、
会議に参加しているお歴々全てに向かって発言された。それは会議の流れを決定付ける発言だ。

単純にウォレンサーという大諸侯がフォリヴァスを支持すると表明しただけではない。
自分の軍勢を食わせる事ができるなら、とその条件までつけたのだ。
そして議場が再び混乱に陥る前に、カシュール・フォリヴァスは畳み掛けるようにいった。

「我がフォリヴァス家には多少の蓄えがあります。
我が指揮下にある方々を略奪に走る野盗の群れにさせない事をお約束しましょう。
それが『王国宰相』たる者の義務でありますから」

それは、フォリヴァス家の家宰が聞いたら卒倒するような発言だったが、俗人諸侯たちの支持を集めるには決定的な言葉だった。
戦争をする場合、もっとも頭を痛める問題は、兵士達の食い扶持、糧秣の確保だ。
経済力の弱い弱小諸侯ほど、その問題は切実だ。しかも今年は東方を中心に長雨による不作が見込まれている。
手弁当で出兵するのは厳しい情況だ。だがそれを肩代わりしてくれるというならば、これほどありがたい事はない。
弱小諸侯たちの支持がカシュール・フォリヴァスへ傾くのは当然の事だった。
これを見たダマルーク、ランキン、シルポートの諸氏は異議を撤回した。
魔物との戦いで軍事力に秀でていても、経済的には貧しい辺境に位置するのが三諸侯の立場である。
フォリヴァス家の経済力を盾に取られれば反論も反対もできはしない。

そして更にフォリヴァスに対して追い風になるような発言をした者がいた。大地の女神に仕える女神官長だ。

「我が神殿は『王国宰相』閣下を全面的に支持いたします。
我らが貧しき人々を救う為に皆さまから寄付していただいた財の全てを持って、閣下の壮挙を支えさせていただきます」

大地の豊饒を祈る神殿は、豊作への祈念からさまざまな階層から寄付をもらっている。
それをつかって孤児や老人の保護などを請け負っている。
身寄りのない富裕な老人が、老後の生活を保障してもらうために神殿に自分の財産を寄進する例も少なくない。
有体に言えば、『天使王国』全土に様々な寄付寄進による不動産財産を所持している団体だった。
その彼らがどんな思惑によるものかカシュール・フォリヴァス支持を打ち出したのだ。それも全面的な経済的支援によって。

これによって法と秩序の神に仕える神官長も軍神に仕える神官も口を閉ざした。
両者とも戦争の指導者となる事に名乗りあげなかった大地の女神の神殿の支持を当てにしていたのかも知れない。
法と秩序の神に仕える者は裁判制度をささえ、軍神に仕える者は魔物に対する軍事力で世俗世界と関わっている。
だが彼らの経済基盤は大地の女神に仕える者たちに比べればはるかに小さい。

裁判も、軍事力も、安全な老後の生活を望む人々の数に比べれば必要としている者の数は余りにも少ないという事だ。
ここまで来れば、もはや大勢は決まったも同然だった。魔術師ギルドももはや超然とはしておれず『王国宰相』支持を表明する。
残るはエルフの王やドワーフの王を始めとする諸族の長たちだが、
テッラムリア全体が一丸となって戦わなければならない相手に、彼らだけが孤立して立ち向かうなど、自殺行為にも等しい。

「・・・我々は『天使王国』には属しておらぬ。だが対等な同盟者として協力するのはやぶさかではない」

彼らの矜持からすれば、それが目一杯の譲歩だった。カシュール・フォリヴァスはその言葉を聞くや否や立ち上がった。
会議場に座る者たちの意思が再び変わらぬ前に、全てを決しようと言うように。

「今のお言葉を持って、皆さまが『王国宰相』たる不肖カシュール・フォリヴァスを支持して下さった証と理解させていただきます。
おって戦略会議に移りたいと存じますが、今はこれにて散会させていただきたい。
長時間の会合、ご苦労様でした。戦略会議につきましては明日のこの時間に開始させていただきます」

その言葉を聞いた議場の人々は複雑な溜め息とともに開放された。ある者たちは安堵し、またある者たちは憤り不満を口にする。
傍聴席のポルメリアは安堵した者の一人だった。同時に不満や不安も感じていた。

「・・・全てはウォレンサー公との事前の打ち合わせで決められていたのですね」

彼女は尋ねるともなくフィスエシルに呟いた。

「そうね。それで会議の行方は一気に決定されたわね。
法と秩序の神や軍神の神官たちが大地の女神の神官たちと事前打ち合わせをして、
大地の女神に仕える者が聖職者側に立ったら、こんなに上手い具合には話は運ばなかったでしょうけど」

「では事前の打ち合わせは大地の女神の神官たちも巻き込んでいたのですね？」

「何故そう思うの？」

「『王国宰相』閣下ともあろうお方が、不確かな予想で会議の行方を占うとは思えませんから」

「そうね。用意周到という言葉はカシュール坊やの為にあるようなものだからねぇ」

「・・・茶番ではないのですか、これは」

「いいえ、違うわ。必要な儀礼よ。公の場で、一体誰がこれだけの根回しをし、
人々をまとめる事ができるのか、実体験として彼らに示さなければならない。
人とは、自分が見聞きしたものこそ信頼する生き物よ。今、この段階で誰が一番力を持っているのか。
これで会議に参加した人たちは理解したでしょう。これは時間の無駄でも茶番でもないわ。
人は納得してこそ動く事ができる生き物ですもの」

「では、これでカシュール・フォリヴァス公を中心に『天使王国』が動き出すと、そう考えていいのですね」

「そうね。他にも細かい問題は起こるでしょうけど、カシュールが諸侯たちの食い扶持を保証する限り、
彼を中心に全ては動き始めるのでしょうね」

「私を動かす者が用意周到なカシュール公であると、貴女はそれを見せたかったのですか？」

そこでフィスエシルは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「それはたまたまよ。私だってここまで手際よくまとめてしまうとは思わなかったもの。
案外カシュール坊やは王様の器かも知れないわね」

「この会議がその証だと？」

ポルメリアは怪訝そうな顔をしている。彼女の思い描く良き王の姿とは、
人々を励まし自ら陣頭に立って戦う騎士ではないかとぼんやり考えていた。
会議の場で道義によらず多数派工作を行う者が王であるとは思いたくなかった。
だがフィスエシルは彼女の考えを否定するように言った。

「良い王様とは何なのか、時と場合によって違うと思うわ。
だけど人を率いる者は、人がその道を選ばざるを得なくする事に長けている者でなければ問題が起こるものなのよ。
今のところカシュール坊やは上手くやったわ。このまま彼が上手く『王国宰相』を演じ切る事ができたなら、
『天使王国』は悪魔たちと戦う事ができるでしょう」

「だからカシュール公に従えと？」

「貴女の望みは悪魔と戦い、彼らをテッラムリアから追い出す事でしょう？今のところ、カシュール坊やを支持した方が近道ね」

そういうとフィスエシルはひらひらと手を振りおつきのエルフの少女たちを伴って傍聴席から出て行った。
そんな彼女の後ろ姿を見送った時、入れ替わるようにやってきた少女にポルメリアの瞳は見開いた。
それは自分の映し絵のような少女だった。それが誰なのか。彼女には解っていた。

ここまで来れば、もはや大勢は決まったも同然だった。魔術師ギルドももはや超然とはしておれず『王国宰相』支持を表明する。
残るはエルフの王やドワーフの王を始めとする諸族の長たちだが、テッラムリア全体が一丸となって戦わなければならない相手に、
彼らだけが孤立して立ち向かうなど、自殺行為にも等しい。

「・・・我々は『天使王国』には属しておらぬ。だが対等な同盟者として協力するのはやぶさかではない」

彼らの矜持からすれば、それが目一杯の譲歩だった。カシュール・フォリヴァスはその言葉を聞くや否や立ち上がった。
会議場に座る者たちの意思が再び変わらぬ前に、全てを決しようと言うように。

「今のお言葉を持って、皆さまが『王国宰相』たる不肖カシュール・フォリヴァスを支持して下さった証と理解させていただきます。
おって戦略会議に移りたいと存じますが、今はこれにて散会させていただきたい。
長時間の会合、ご苦労様でした。戦略会議につきましては明日のこの時間に開始させていただきます」

その言葉を聞いた議場の人々は複雑な溜め息とともに開放された。ある者たちは安堵し、またある者たちは憤り不満を口にする。
傍聴席のポルメリアは安堵した者の一人だった。同時に不満や不安も感じていた。

「・・・全てはウォレンサー公との事前の打ち合わせで決められていたのですね」

彼女は尋ねるともなくフィスエシルに呟いた。

「そうね。それで会議の行方は一気に決定されたわね。
法と秩序の神や軍神の神官たちが大地の女神の神官たちと事前打ち合わせをして、大地の女神に仕える者が聖職者側に立ったら、
こんなに上手い具合には話は運ばなかったでしょうけど」

「では事前の打ち合わせは大地の女神の神官たちも巻き込んでいたのですね？」

「何故そう思うの？」

「『王国宰相』閣下ともあろうお方が、不確かな予想で会議の行方を占うとは思えませんから」

「そうね。用意周到という言葉はカシュール坊やの為にあるようなものだからねぇ」

「・・・茶番ではないのですか、これは」

「いいえ、違うわ。必要な儀礼よ。公の場で、一体誰がこれだけの根回しをし、人々をまとめる事ができるのか、実体験として彼らに示さなければならない。人とは、自分が見聞きしたものこそ信頼する生き物よ。今、この段階で誰が一番力を持っているのか。これで会議に参加した人たちは理解したでしょう。これは時間の無駄でも茶番でもないわ。人は納得してこそ動く事ができる生き物ですもの」

「では、これでカシュール・フォリヴァス公を中心に『天使王国』が動き出すと、そう考えていいのですね」

「そうね。他にも細かい問題は起こるでしょうけど、カシュールが諸侯たちの食い扶持を保証する限り、彼を中心に全ては動き始めるのでしょうね」

「私を動かす者が用意周到なカシュール公であると、貴女はそれを見せたかったのですか？」

そこでフィスエシルは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「それはたまたまよ。私だってここまで手際よくまとめてしまうとは思わなかったもの。案外カシュール坊やは王様の器かも知れないわね」

「この会議がその証だと？」

ポルメリアは怪訝そうな顔をしている。彼女の思い描く良き王の姿とは、
人々を励まし自ら陣頭に立って戦う騎士ではないかとぼんやり考えていた。
会議の場で道義によらず多数派工作を行う者が王であるとは思いたくなかった。
だがフィスエシルは彼女の考えを否定するように言った。

「良い王様とは何なのか、時と場合によって違うと思うわ。
だけど人を率いる者は、人がその道を選ばざるを得なくする事に長けている者でなければ問題が起こるものなのよ。
今のところカシュール坊やは上手くやったわ。
このまま彼が上手く『王国宰相』を演じ切る事ができたなら、『天使王国』は悪魔たちと戦う事ができるでしょう」

「だからカシュール公に従えと？」

「貴女の望みは悪魔と戦い、彼らをテッラムリアから追い出す事でしょう？今のところ、カシュール坊やを支持した方が近道ね」

そういうとフィスエシルはひらひらと手を振りおつきのエルフの少女たちを伴って傍聴席から出て行った。
そんな彼女の後ろ姿を見送った時、入れ替わるようにやってきた少女にポルメリアの瞳は見開いた。
それは自分の映し絵のような少女だった。それが誰なのか。彼女には解っていた。